

## Dコース

東札幌・白石中央巡り 4.7km



スタート・ゴール 白石区複合庁舎

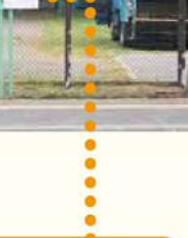
- 22 横丁通
- 23 白石のリンゴ園跡
- 24 エゾオオカミ捕獲の場所
- 25 白石村水田発祥之地

- 26 納豆博士・半澤洵生誕之地  
はんざわじゅん
- 27 豊平外三ヵ村聯合用水路  
とよひらほかさんかそんれんこう
- 28 望月寒川  
もつきさむ

22

## 横丁通

東札幌3条4丁目 きよみず公園内



## 横丁通(札幌本府通)=現・米里行啓通

旧暦明治4年(1871)11月に旧仙台藩白石城主片倉小十郎の元家来たちが  
入植し、現在の国道12号の中央1条1丁目の跨線橋付近から白石神社までの間に  
住み着き、道の両側に1番から50番まで区画割りをした。しかし翌春、左右1  
番から7番までの区画が雪解け水で浸水し、居住地として適さないことがわ  
かった。

そのためこの間の18戸は、国道12号から横に入った札幌本府通沿いに移り  
住んだので横丁と名付けられた。札幌本府通は明治5年5月には豊平村の今の  
国道36号まで延長されたが、横丁を通るこの区間は横丁通とも呼ばれるよう  
になった。

なお、この横丁通を主な生活道路として利用した集落を、行政的に横丁(後に  
横町)と呼んでいたが、昭和35年(1960)3月31日付で町名を東札幌と改正  
したことにより、長年使用された横丁・横町の名称はなくなった。



✓ 着いたらチェック

明治5年(1872)春、現在の国道12号  
線沿いの低湿地に住んでいた18戸が、浸  
水を避けるために本通から横道にそれた  
「横丁(現在の米里行啓通)」沿いに移住し  
ました。同年、白石神社から横丁通り、  
現在の国道36号に抜ける札幌本府道が  
開通。そのうち、現在の中央1条3丁目か  
ら国道36号までの区間が「横丁通」と呼  
ばれました。

23

## 白石のリンゴ園跡

東札幌3条4丁目 きよみず公園内



### 白石のリンゴ園跡

リンゴが日本に入ってきたのは鎌倉時代だが、本格的には明治4年(1871)に東京の開拓使がアメリカから輸入した果樹の栽培に始まる。明治6年にはそれを開拓使札幌庁舎の果樹園に移植し、明治8年から20年までに無償・有償でナシ、リンゴ、桃、アンズ、スマモ、サクランボ、梅、ブドウの苗木671,600本を開拓者に配布し、白石村にも25,474本が配布された。

なかでもリンゴの栽培が普及し、白石では豊平川付近から現在の地下鉄白石駅付近までリンゴ園が広がった。リンゴはロシアなどに輸出され、リンゴ景気にわいた一方で病害虫に悩まされ、廃園する者も続出した。戦後の混迷期にもリンゴは売れたが、昭和25年(1950)に札幌市と合併してから宅地化が進み、白石果樹組合は昭和35年に解散した。



明治初期から果樹栽培が札幌に普及。全道の果実生産の8割を占め、ロシアなどの海外にも輸出されました。

白石村でも開拓使官吏・津田教助らが現在の東札幌周辺でリンゴ園を経営し、品評会でも好成績を収めました。

✓ 着いたらチェック

24

## エゾオオカミ

捕獲の場所 中央1条3丁目



### 世界でただ1頭の標本となった エゾオオカミを捕獲した場所

開拓が始まったばかりの明治初期の白石は原始林や荒れ地で、ヒグマ、エゾオオカミ、エゾシカなどが住む世界だった。

エゾシカは、大雪による食糧不足と、作物の害獣として駆除されたために絶滅寸前となり、そのエゾシカを主な餌とするエゾオオカミは馬を襲うようになったため毒薬で殺され、明治20年頃に絶滅した。

明治10年(博物館の説明板では12年)に、この場所で昼寝していたエゾオオカミが村人に火縄銃で撃ち取られ、現在では世界でただ1頭のエゾオオカミの雄の標本として北海道大学付属植物園内の博物館に展示されている。



開拓当初、白石はエゾオオカミやヒグマなど野生動物が多い土地で、家畜や住民が度々被害に遭っていました。

この場所で駆除されたエゾオオカミが、貴重な標本として北大植物園内の博物館に展示されています。

✓ 着いたらチェック

25

## 白石村 水田発祥の地 中央3条5丁目 白生公園内



### 白石村水田発祥の地

明治の初め、北海道は稻が育たない地として、もっぱら麦と畑作が農業の中心がありました。

この地に入植した旧白石藩の人たちは、明治7年に故郷から種粒を取り寄せ、稻の作付けを試みましたが、厳しい気象条件に打ち勝つことができず、一粒の米も収穫できない年が続いたのです。

しかし、コメに対する強い思いと、旧白石藩土としての団結心で、この白生公園一帯の荒れ地を共同で開墾。明治16年、初めて穀79俵(約5.5t)の収穫をあげたのでした。白石米第一号の誕生です。

その後も、日照りや冷害、病害虫に強い稻の品種改良を重ね、その努力が実って、毎年、少しづつ収穫をあげていくことができました。

白石村の稻作成功は、やがて、札幌近郊に稻作を広めることとなり、水田経営の模範として讃えられたのでした。


 ✓ 着いたらチェック

26

## 納豆博士・ 半澤 淳生誕の地 中央1条5丁目



### 納豆博士 半澤淳生誕の地

北海道帝国大学(北海道大学の前身)の教授で応用菌学の権威である半澤淳博士は、明治12年(1879年)1月9日、札幌郡白石村に誕生しました。

主な業績の一つに納豆菌の研究があります。それまでの納豆は雑菌も含んだ糞わらを使用していましたが、純粋な納豆菌を培養し、経木(薄皮)の容器を使用することで、衛生的で量産も可能な方法を確立しました。それは大学納豆として広まり、教授は親しみを込めて納豆博士とも呼ばれるようになりました。

社会奉仕活動にも熱心に取り組み、新渡戸稻造博士が創立した遠友夜学校に学生時代から参加し、大正10年に代表に就任。後には三代目校長として、昭和19年の閉校まで長く関わりました。また、北海道共同募金会には準備委員としてその創設に努め、初代会長に就任しました。

数多くの業績を残した博士は、昭和47年(1972年)9月25日、93歳の生涯を終えました。


 ✓ 着いたらチェック

半澤淳博士は明治12年1月9日、白石村31番地に、半澤時中と加代の長男として誕生。

大正5年(1916)6月、北海道帝国大学(北大の前身)教授となり、応用菌学の第一人者として数々の研究論文を発表。中でも科学的で衛生的な「半澤式改良納豆製造法」を広め、わが国の納豆製造法は現在もこの方法で行われています。

27

とよ ひら ほか さん か そん  
豊平外三カ村  
れん ごう

**聯合用水路** 東札幌6条4丁目 もつき公園内



とよ ひら ほか さん か そん れん ごう  
**豊平外三カ村聯合用水路**

飲料水などの生活用水路として精進川から取水して豊平川へ注ぐ平岸用水堀が明治6年に造られていたが、稻作が盛んになると、この用水堀からさらに豊平、平岸、白石、上白石の各村へ注ぐ1号～4号用水路が豊平外三カ村聯合用水組合によって造られ、以後明治45年(1912)までに5号～15号用水路が造られた。この標示板がある通には1号用水が流れている。

用水路は用水組合によって共同管理され、修理は全村あげて一斉に行われ、その後の慰労会は4村組合員の交流の場となった。また物価が高いときは、田植え、草取りなどの賃金協定を行い、お互いの負担を軽くする役目も果たした。

昭和22年以降の農地改革で自作農が増え、用水はますます活用されたが、都市化が進むと水田耕作者が減り、昭和36年(1961)に聯合用水組合は解散した。



✓ 着いたらチェック

28

も つぎ さむ  
**望月寒川**

東札幌6条5丁目 東札幌にれ公園内



も・ちきさつぶ  
**白石の母なる川—望月寒川\***

望月寒川は真駒内南部の丘陵を源とし、白石一帯を抜けて月寒川に合流する12番の二級河川である。

白石村の開祖となった元仙台藩白石城主片倉小十郎の元家来たちは、明治4年(1871)に月寒台地から望月寒川流域一帯を見渡して、自然の恵みが豊かなこの土地に村を開くことにした。

望月寒川にはウグイ、ニジマス、サケなどの魚が豊富で、水は生活用水、農業用水としても欠かせなかった。明治7年から水田試作が始まり、苦労の末に一帯は美田になった。

その一方で家屋浸水、田畠の水没などの害ももたらした。望月寒川は白石村民にとって喜びと悲しみをもたらした忘れ得ぬ川なのである。

昭和41年以降の区画整理で水田は宅地化し、望月寒川は直線化された。野性味がなくなり生活との関連も希薄になったが、変わらぬ流れが今も区民を見守っている。

\*モ・チキサップは、アイヌ語でモ=小さい、チキサブ=アカダモの木片で火をおこしたところ、など諸説がある。



✓ 着いたらチェック

真駒内南部の丘陵が水源。「モ」はアイヌ民族の言葉で「小さい」を意味し、望月寒川は「月寒川の支流」を意味しているとも言われています。

この川は度々水害を起こしましたが、コメを実らせ、貴重なタンパク源でもある川魚を育てるなど、村民にとっては大きな恵みをもたらす母なる川でした。